

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2017年5月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 平成29年5月26日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫

No.52



日中は清々しい初夏の陽気が続きますが、会員の皆様如何お過ごしでしょうか。

さて、今年2回目のコンサートは9月16日土曜日、午後4時開演、昨年12月1日に竣工しました、山崎製パン総合クリエーションセンター内の飯島藤十郎社主記念LLCホールにて「癒しの音楽コンサート」を、ゲストにベアンテ・ポーマン(チェロ奏者)さんを迎え開催する運びとなりました。ベアンテ・ポーマンさんは、スウェーデンのファルン市で生まれ1980年から2011年3月までの31年間、東京交響楽団の首席チェロ奏者を務め退職後、玉川大学芸術学部の非常勤講師として後進の指導にあたり2016年3月に退職、現在はソロやさまざまなオーケストラの客演首席チェロ奏者としての演奏活動を行なう一方、チャペルコンサートをはじめとする宣教の働きにも携わっております。

今回は初めてゲストをお迎えしての開催です。多くの方々にこの素晴らしいハーモニーをお聴きいただければ幸いです。ご来場お待ち申し上げます。

久しぶりの温泉めぐり

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

会員の皆様こんにちは！

年々春の期間が短く、冬から夏が突然やってきたような気がいたします。涼しくても照りつける日差しは亜熱帯のような気候を感じます。さて、私はこの3月末から5月にかけて鳥羽、箱根、湯河原の温泉に行ってきました。(この忙しいのに…)

鳥羽は、伊勢神宮参内宮宇治橋手前の鳥居から美しい日の出を拝みたくて3泊しました。神宮の職員の方にお話をお聞きしましたら、当たり前ですが、日の出の位置は毎日移動し、ちょうどこの鳥居のところからは冬至の前後2ヶ月だそうです。どうおりで、なかなか日の出が見られなく山の向こうから明るくなって…！ぜひ次回はこの時期に来るぞ！と心の中で誓いました。

3日間毎日4時半に起きて鳥羽の温泉ホテルから伊勢神宮に通いましたがまだ寒く、宇治橋には霜が降りて寒く最初の二日間は雨だったのですが、素晴らしい清らかな空気の中、玉砂利の音、鳥の音、木々のささやきの中、お参りすることができました。

ちょうど2日目はお朔日で、朝4時半ごろ伊勢神宮に着いたのですが、もう駐車場はいっぱい、かなり遠い駐車場に止めることになりましたが、赤福のお店では長蛇の列。その月の朔日餅を買うために雨の中2時間以上並ぶ人たち、そして朝粥をいただくためにまた並び、お店が朝4時から大賑わい！でも、並んでいる人たちはお参り終わったのかしら？お参り？お粥？和菓子何が大事？私も並び始めましたが、お参りを先にしました。結局、ゆっくりお参りをさせていただいた後、赤福のお店で、4月の桜餅をいただくことができました。(笑)

鳥羽の温泉も素晴らしく、久しぶりに水族館でゆっくり！アシカショーを堪能したり、生き物の不思議を体験しました。そして、どうしても桜が見たかった忍野八海へ！箱根の温泉に浸かり、希望通り満開の桜を堪能！

(Wikipedia から引用すると)

忍野八海とは、山梨県忍野村にある湧泉群。富士山の雪解け水が地下の溶岩の間で、約20年の歳月をかけて濾過され、湧水となって8ヶ所の泉をつくる。とのことであります。

ここの8ヶ所の泉がすごい！それぞれの泉は地下で繋がっていて、大きな美しい鯉が住んでいるのですが、それぞれの泉を行ったり来たりしているらしい。ネーミングがまたいけています。昔の風景がそのまま残っている[底抜池(そこなしいけ)]池、[湧池(わくいけ)]「お釜池」「銚子池」、「濁池」「鯉の池」「出口池」「菖蒲池」そして、人口ですが水深8メートルある「中池」。それぞれに守護神がいるらしい。小さい泉ですが、じーっとみていると、水面に雲や景色などが写り鳥の声を聞きながら不思議な感覚になります。

実は富士山がくっきりと現れるとすごいらしいですが、残念ながらまだ富士山を背景にした忍野八海を見られていません！また、近々今度は富士山とのコラボレーションを見に行きたいと思っています。

さて、今年の9月のコンサートはとても楽しみにしています。私たち三人官女にベアンテ ボーマンさんというスウェーデン生まれの、宣教師、神学校教師、そして東京交響楽団首席チェロ奏者でもあった方をゲストにお迎えします。響きのすばらしい山崎パンのホール！是非いらしていただきたいと思います。

最近のご縁のありがたさを感じる今日この頃です。皆様に助けられて生かされていると感じます。初めまして！とご挨拶しても、誰かと誰かと繋がっていたり、親しい知り合いが隣の家に住んでいたたり、10年ぶりに出会ってしまったたり、知らないところでご縁の糸が繋がっているのですね。皆さま！至らない点もたくさんありますが、どうぞこのご縁を大切に何卒お願い申し上げます！

ムッシュ黒木の純正律講座 第51時限目
平均律普及の思想的背景について(40)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

芸術作品の価値は<神>との関係で決まる。「私」がいかに感動したから、でもなく、多くのファンがいるから、でもない。<神>にどれだけ近づけたかで作品の価値が決まるのだ。民主主義に基づく現代＝モダンの時代が始まるまで、芸術の評価基準はこのようであったし、実のところ、現代＝モダンの時代における芸術のあり方も「神のための芸術」から発展したものであることを言うておく。

もちろんこの<神>とは、いかがわしい新興宗教の神とは違うものであることを言うておく。ましてや神道における八百万の神とも違う。ユダヤ・キリスト・イスラーム教といった一神教の神とはこの世界＝宇宙の創造主なのだ。あるいはこの世界＝宇宙を創った存在のことを<神>と呼んでいるとも言える。ということは、この世界＝自然がどのように成立しているのかを探求している自然科学の営みは、元来神がこの世界＝宇宙どのような意図のもと創ったかを探る試みだし、芸術が<自然>の模倣を目指すということは、<神>がこの世界＝宇宙を創った際の法則性を作品の中に写し込もうとするということなのだ。

この世界＝宇宙の創造主の創造者を<神>と呼ぶならば、そこにおける<神>への信仰と多様な宗教間の共存は両立しなくなる可能性が浮上する。世界には様々な文化があり、それぞれの宗教を信じている多種多様な民族がある。それらが共存していくためにはそれぞれが違っていることを認めた上で互いに互いを尊重することが肝要である、ということになるだろうか？あるいは、私たちは私たちの神を信じているけれど、貴方達が自分たちの神を信じることを否定しないし尊重するのだから、私たちが私たちの神を信仰することを尊重しろ、という立場だとも言える。確かに正しいように思えるが、一神教の原理

はこれとは実は相容れない要素があることを指摘しておきたい。つまり、この世界には様々な民族がおり、多種多様な宗教があるが、それらを含めてこの世界＝宇宙全体を創ったのが＜神＞であり、その＜神＞の秘密を探求しているのが私たちの宗教なのだ、という思想である。確かに、世界には様々な文化があり、様々な民族がいる。現状、我々は一つの文化を共有しているわけではない。しかし、我々が住んでいる世界は一つであり、それはあらゆる人々によって共有されている。であれば、表面上の些細な違いは置いておいて、この世界＝宇宙を創造した存在について考察することが、学問なり真の宗教人の役目ではないか、と一神教は考えるのだ。異教の人々が望むのならもはや＜神＞のことをヤハウエ、イエスあるいはアッラーなどと呼ばなくても構わない、しかしこの世界＝宇宙に生きる以上それを創造した存在を敬い、その成り立ちについて探求することが真の宗教家の役目である、ということだ。このような考え方のもとでは多様性を讃える思想は全て創造者への信仰へと吸収されてしまう。

かつてはキリスト教の名において、そして現在は民主主義の名において、このような文化と価値観の押し付けが行われている、というのが非西洋地域での右翼思想の思想の根幹となっていると言えるだろう。純粋な自分たちの伝統を叫びつつも、結局は西洋思想に対するカウンターパートでしかないところが底の浅さを露呈させてしまうことはさておいて、先ごろマーティン・スコセッシが映画化して話題になった遠藤周作の小説『沈黙』のテーマであることを指摘しておきたい。例えば、遠藤周作は主人公の修道士に「ホトケも我々と同じように死を免れますまい。創造主とは違うのです。[...] あなたたち万物は自然に存在し世界には始めもなく終わりもないと [...] しかし命のないものは他物がそれを動かすのでなければ、自分から動くことはできぬ。ホトケたちはどうして生まれたのか。またそのホトケたちは慈悲の心があるのは、わかりますが、しかしその前にこの世界はどうして創られたのか。我々のデウスは自分らを創り、人間を創られ、万物にその存在を与えたものだが」と語らせる。

当然、日本人はこのような文化の押し付けに反発し、キリスト教を弾圧しようとする。それがこの小説の代官たちである。ところが創造者を理解していないのは代官たちだけではない。日本人の信徒も同様なのだ。遠藤周作はやはり修道士に「デウスと大日と混同した日本人はその時から我々の神を彼等流に屈折させ変化させ、そして別のものを作りあげはじめたのだ。[...] お前がさっき口に出した布教がもっとも華やかな時でさえも日本人たちは基督教の神ではなく、彼等が屈折させたものを信じていたのだ」と語らせる。

純正律の響きに価値があるとすれば、単に美しいからではない。その作品の規則性が＜神＞が世界＝宇宙を創造した際の設計図を写しているからに他ならない。となれば、純正律の和声を否定しようとした前衛音楽には、＜神＞中心の芸術のあり方への批判があったということになる。

私自身はキリスト教徒ではないが、西洋に端を発する芸術を考える以上、その基盤となったキリスト教思想については理解しておく必要があるだろう。しかし、遠藤周作が嘆いているように、日本人には高尚な芸術やキリスト教は分からない、ということになれば、事態は絶望的と言うしかない。

CD レビュー 純正茶寮

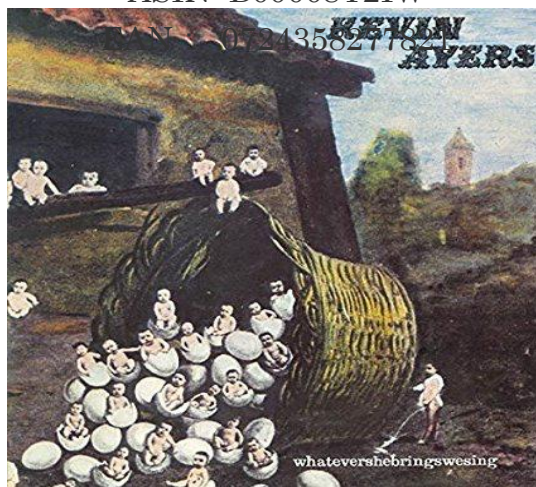
『Whatever she bring』

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

『Whatever she bring』

Kevin Ayers

ASIN: B00008Y2IW



デカルトの音楽論をやっている名須川学氏と音楽の話をしていて、音律も重要だが音色も重要だ、という指摘をされた。まさにその通りである。

というわけで、何か音色に関して面白い作品はなかったか、と思いを巡らせた。色々で紹介したいアーティストはいるのだが、今回はケヴィン・エアーズのこのアルバムにした。

これを買ったのは高校3年生の終わり頃だった。マイク・オールドフィールドが参加し、デイヴィッド・ベッドフォードがオーケストレーションを担当しているとあり、高度なプログレッシヴロックが聴けるものと期待して購入したのである。

ところが、その予想に反して牧歌的なのんびりとした楽曲が鳴り響き、拍子抜けしてしまったことを思い出す。確かに、オーケストラも入っているし、ヴァイオリンがヴォーカルと掛け合ってカウンター・メロディを奏でている曲もある。にもかかわらず、プログレッシヴというのとは程遠い曲調だ。にもかかわらず、ハマってしまった。高三最後の春休み、気だるい春の陽気の中、こればかりを聴いていた。

そもそも、ケヴィン・エアーズは、ソフトマシーンの創設メンバーで、ジョン・ケールやマイク・オールドフィールドと仲が良いということで、プログレ扱いされているだけで、彼の音楽は全くもってプログレではない。また彼もそ

の自覚はないだろう。CDが置かれている場所が友人のプログレミュージシャンのそばというだけなのだ。

その彼の魅力は独特の歌唱にあると言って良い。なんだか低音でブツブツ呟いているようなその歌声は、果たしてちゃんと音程を取れているかどうかともわからない。バックヴォーカルの方がさすがにプロだけはあり、よっぽどしっかりしている。

しかし、世界中のファンはその歌声に魅了される。上手いとか下手とかはもうどうでもよく、ケヴィンの歌声とそのゆったりとした雰囲気が好きなのだ。やはり音楽は面白いと思う。

連続6回ドラマ音楽の現場 第四回 日活での体験

玉木宏樹遺作

何度も言うが貧乏学生だった私は地道にオーケストラに入るような身分ではなかった。もともと映画音楽をやりたいという希望をもっていたので当時、一番忙しそうだった山本直純氏のアシスタントとして修業する道を選んだ。直純氏に関する面白い話はかず限りなくあるが、それは別の機会にゆずるとしよう。

私はもともと作曲をやりたいという希望をいただいていたにしても、所詮ヴァイオリン科の卒業の身では、和声法や対位法という重要な基礎知識にも乏しく、見よう見まねの毎日だった。直純氏は各社の映画音楽を担当されたが、なかでも一番多かったのは日活だった。アシスタント時代の私が強烈な印象を受けたのが、「チゴインエルワイゼン」等で有名な鈴木清順監督だった。氏のユニークさはいろんな人に語られているので、ここでは、直純氏のもとでの傑作な話をご披露しよう。

監督のいろんな作品のなかでも「けんかエレジー」というB級エンタテインメント作品は非常に印象に残っている。時は「昭和維新」の時代、つまり、2、26事件の頃だ。主人公はケンカだけがとりえのような、アラクレバンカラ男。どこをどう見ても「恋」とは縁どおい日常生活のなかで、はじめて見初めてしまった「お嬢さん」は、ケンカには全く似合わない「ピアノ」をお弾きになる。主人公はほとんどカルチャーショック的に「恋」に目覚めるわけだが、あるとき思いあまって、そのお嬢さんのピアノの部屋に忍びこむというシーンがあった。

青年は辺りをキョロキョロみまわしながら、ズボンをずりおろす。そしてこれからが微妙なところなのだが、画面上では、青年が一途な顔をしてピアノの前で上下運動をしているというサマを想像して欲しい。打ち合わせの時には当然音は入っていないので、何をやっているのかは、なかなかわからない。しかし監督は、音が入れば誰にでもわかるとあって涼しい顔をしている。どう言うことかおわかりだろうか。

青年は、恋するお嬢さんのことを激しく思慕しながらボッキした一物で鍵盤

を叩いて、マスターベーションをしているというシーンなのだ。音入れでは満場爆笑だ。画面の青年の上下運動にあわせて、ピアノをポロポロと叩くのだ。いちばんおかしかったのは、ボッキした状態のペニスではピアノの鍵盤を下から上に叩くのなら自然だが上から下へ叩くというのは反対動作だから実際には不可能だろうと監督自らが言い放ち、静かな大笑いをされていたことだった。実に面白い監督である。のちに監督が日活をやめる原因となった最後の作品「殺しの烙印」の打ち合わせの時も傑作だった。

人間の想像力の限界の、そこ知れない深さを見せつけられた、激しくスマートで奇怪な映像で、もちろん、真理アンヌの大胆な裸体と、おへそのまわりのうぶげにも驚いたが、それを上回る感覚刺激には恐怖すら覚えたものだった。半分くらいしか音声の入っていない超前衛的な映像は、やたらと感激中枢を刺激はするものの、一体どんなストーリーだったかというような概念把握を拒否してしまい、早い話が、何が何やらわからなくなってしまう。試写を見るなり監督は直純氏に「どう、わかる？」ときいた。さすがの直純氏も「まあ.....」とかいって苦笑いするしかない。すると監督は、「ハハハ、わからんだろう、私にもわからん」といって笑い飛ばしてしまうのである。

「殺しと裸だけで作れと命令されたんでねえ.....」

いくらクビ覚悟とはいえ（それは後からわかったことだけど）、ずいぶん腰の座った度胸のあるひとだなあと感心したものだった。

やがて私は直純氏のもとから独立し、主に日活映画を何本か担当した。しかし時すでにおそく、映画界は最悪の時期を迎えつつあったのだ。私が一本立ちしてからわずか一年あまりで日活は既成路線を捨て、いわゆる「日活ロマンポルノ」路線をとるようになった。

旧日活の最後の作品は藤田敏八監督の「八月の濡れた砂」ということになっているが、私は、その同時上映のウラ作品「極楽坊主」というほとんどロマンポルノと変わらないものの音楽を担当しており、旧日活映画音楽のブービー担当者というわけでもある。

旧日活の最後の数年は、お世辞にも上品とはいえない作品ばかりだったが、それでも最後の開き直りのような、いさぎよい自由なふんいきの仕事場ではあった。制作費はもう底をついているから、主演も監督も音楽もすべて金のかからない新人ばかりである。その中に私も入っていたというわけだ。ここで映画音楽はどういうふうに発注され打ち合わせをするのか、少し説明しておこう。

なぜか日本映画の場合、音楽担当は最後まで決まっていなかったことが多い。監督にとって最後の頼みの綱は音楽のはずなのに、はじめのうちはどうも眼中にないらしい。制作部の黒板のスタッフ一覧を見ても、音楽はいつも空欄のことが多かった。もらった台本はすでに第三稿くらいで、しかもまだ音楽担当は空欄のままということはよくあったものだ。本来ならば、クランクインする前に音楽打ち合わせをしておくのが当たり前のはずなのだが.....。クランクインしてから一月後に音楽録音という、猛烈なスケジュールのなかでの音楽打ち合わせの密度の高さたるや大変なものである。ボウっとしているとすべて向こうのペースにはまってしまう。オール・ラッシュという、一応の編集がすべて終わ

った段階の試写までに、何回か部分ラッシュを見ながら音楽の指定を決めていくのだが、私以外のスタッフは全員、シミからシミまで把握しているものだから、打ち合わせのスピードはむちゃくちゃに早い。

「**ページ、はい、主人公登場、テーマよ！ 振り向きの気づきからシーンいっぱい」「つぎは**ページ、悪のテーマ。含み笑いから入って、部屋いっばいで、出ていくドアのしまる音まで」と、こんな調子で進んでいくのだが、こういう紋切り型の入り方ならハイハイとっておけばいい。困るのはたった一回しか見ていないのに（それもロクに音声の入っていないものだと理解不能な場面もある）、「玉木ちゃん、このシーン、音楽欲しいんだけど、どこから入ったらいいかねえ」と急にフリをまわされた場合で、内心ぎょっとして焦ってしまうことがよくある。ほとんど覚えていないシーンなので必死に台本を眺め回すが、どう見ても音楽なんかお呼びじゃないはずなのだ。それなのに他のスタッフも思いつめた表情でどこで入るかを検討している。

段々わかったことだが、たいていこういう場合、必然性のある音楽など要求してはいないのだ。演出上の問題等で思うような場面が撮れなかったとかいうことで、絵が「もたない」から音楽をつけてほしいというわけなのだ。

だいたい最初にラッシュを見終わった新人監督はたいてい、開口一番こういうものだ。「玉木ちゃん、うんとよごしてね、お願いだよ、たくさんよごしてね」この「よごす」というのは独特の撮影所言葉で、効果音や音楽を入れることをいう。

バカヤロ、おれはペンキ屋じゃねえんだという思いと同時に、ああ、おれもギョーカイ言葉で話しかけられるようになったかという、変にプライドをくすぐられる瞬間でもある。

どのシーンにどういう音楽を入れるかということを考える作業は、直接に作曲することよりも重要で面白い作業でもあるが、くれぐれも監督のいいなりにならないように注意しないと、曲数はどんどんふくれあがってしまう。日活の場合、アクションものが多いから、他社よりはどうしても音楽が多めになる傾向があるとはいえ、通常一本20～30曲のところ、新人監督のいうことをすなおにきいていると、すぐに50曲近くになってしまう。こちらとしては生活をかけて音楽を削ることに専念する始末である（映画音楽のギャラは一本ごとの計算なので、曲数がいくら多くても何の関係もない）。

ギャラは別にしても、本来、ある程度の曲数を越えてしまうと人間の聴覚は麻痺してしまっていて、効果は半減してしまうものなのだ。だから新人監督には「大丈夫ですよ、もちますよ、もってますよ、ねえみなさん」というような言葉を何回言ったことか。

映画音楽もずいぶんなされた武満徹氏が、さるラジオ番組で映画音楽のことを語りながら、やはり打ち合わせでの、音楽を削る難しさを話しておられて、思わず同感と拍手したものである。

仕事にも段々なれてくると、こういうせめぎあいが逆に楽しくなってきたりしたものだったが、ある作品では全くそんなことをするひまもなく、監督に全面降伏したことがある。それは、藤田敏八監督の「野良猫ロック」シリーズの

なかの一本だった。

いよいよ末期症状の日活としては、ついにセットなし、すべてオープンロケ、制作も外部発注という苛酷な状況に追い込まれてしまったのだが、何よりも悲惨だったのは、その映画が7月公開というタイミングだった。

内容は湘南海岸を舞台にした、ワルガキ青春群像なのだが、なにしろ時期が悪い。クランクインしたのが梅雨の真最中の6月だったのだ。毎日毎日雨の連続で、撮影予定はめちゃくちゃになり、予定していた音楽打ち合わせは何度も流れてしまう。それでも仕上げの期日はどんどん迫ってくる。デッドラインから逆算すれば自然と音楽録音のギリギリの日もでてくる。

何度も何度もフラれた末に、ついに最終的（といっても実は第一回目）音楽打ち合わせは、なんと録音前日の夜6時ということになってしまった。翌日の録音は定時スタートの朝9時である。6時から3時間打ち合わせに使ったとして、残りは12時間しかない。しかし文句を言うてはいられない。私は覚悟を決めて、6時少し前から目黒のスタジオでスタンバイした。ところが1時間たっても2時間たっても撮影クルーは帰ってこない。時間はようしゃなく過ぎ去っていくのだが、かろうじてとれた連絡でも、とにかく撮影がのびてまして、という言葉しか返ってこない。

スタジオの前にとめる車のエンジン音のたびに、血圧を上げ下げしながらついには怒りもさめてしまった11時半過ぎに、やっと監督たちは帰ってきた。さっそく出来上がっている部分だけのラッシュ試写をやる。明朝、録音だというのに絵は3/4くらいしか出来上がっていない。とにかくギリギリ最低必要な撮影は終えてきたので、作品としては完成できるという、冷汗ものの綱渡りスケジュールの中でラッシュを見終え、さあこれから肝心の音楽打ち合わせという段になって、助監督たちはあたりかまわず横になってグーグーいびきをかきだす始末。本来なら同居していなければならぬSEの人もないし、結局は、監督とスクリプター（映画全体の記録をとり、すみずみまで進行を把握するという大変重要な仕事で、女性専業）と私だけの打ち合わせになってしまった。

それでも最初のうちはいつも通りにここは要るかどうかなどとやっていたのだが、どうも打ち合わせのスピードがはかばかしくない。徹夜続きで疲れ切った監督の思考能力は限界に達しているのだ。こりゃだめだ、無駄な抵抗するのはやめようと思ったころには、本来絶対ありえない状況が起こってしまった。スクリプターまでが舟をこぎだしてしまったのだ。

私は焦ってしまった。言われる尻から、わかりましたと、台本に音楽指定の線を引っ張って行く。そしてどんどん時間は過ぎ行き、2時もこえるとついには監督までがコックリを始めてしまった。緊張し切って起きているのは、ついに私一人になってしまったのである。もうこっちは必死で監督の肩を揺さぶって、「つぎはどこですか、監督、起きてください、ここに入れますよ」と大声で言うと、ほとんど眠ったままの眼でうなずくだけである。そんな状態で指定の終わった音楽を数えてみると、40曲にもなっていた。けっきょく打ち合わせが終わったのは3時を過ぎていた。そしてあくる朝9時から録音である。普通ならば絶対にまにあわない。しかし私はこういうこともあるかと、ボチボチ台本上だけで事前に作曲しておいたからなんとかかなるにはなったのだった。

4、5時間眠ったただけでも監督は朝から元気一杯だった。「玉木ちゃん、ちょっと」を連発する。つまり音楽が少し違うんではないかというお叱りのようなものである。何を言うかいい気なもんだという怒りは、しかし覚えなかった。ただ単にすべての面でのタフさに驚かされたただけであった。

前に述べた、旧日活のブービー作品「極楽坊主」は、もう何をかいわんやのシツチャカメツチャカの内容だったが、何をやっても許される最後の作品ともなれば、こちらとしても何かをやってやろうという気にはなる。

もうロマンポルノ路線そのものと言っていいほど本番シーンが多く、監督はこともなげに、はい、本番ミュージック、と注文する。生々しい本番シーンにつける音楽というのは非常に難しい部類にはいる。本来音楽というものは、本番にはいる前の美しい二人の場面にこそ相応しいものなのだ。

あまりの本番ミュージックの多さにややムっとした私は監督に、本番シーンにはどんな音楽がいいのか教えてくれと言った。すると何をやろうと、君の勝手だ。それこそ作曲家のセンス一つでいい本番に見えるか悪く見えるかきまってしまう、だからいい曲を書いてくれというだけである。私は一計を案じた。何もギッコンバッタンのリズム感につけるばかりが能じゃない。私の提案は次のようなものだった。

本番シーンには生々しい女の声が溢れる（これをギョーカイではスーハーという）。しかしそれこそマンネリの能なしじゃないか、ここは一度でいいから実験的に女コーラスを起用して、曲の中にスーハーを取り込んでしまえばいいじゃないかというものだった。監督は一瞬めくらましに会ったような妙な顔をしたが、じゃあ一度やってみよう、面白いかもしれないということになった。

もちろんのこと私は強く釘をさした。コーラスの音楽がよければ本番のスーハーはやめてくださいと。監督も苦笑しながらOKした。

さて録音である。ひごろはCMなんかでキザな曲を歌ってもらっている、女3人組のトリオをダビングルームに呼んだ。彼女たちとは、とてもエッチなことを話すような仲ではなかったし、多少冗談でそんな話をしてもソッポを向かれるような付き合いだったから、事前になんの前触れもなく呼び込んだダビングルームのフンイキには、相当ビックリしていた。だから譜面を見ても実際にちゃんとやってくれるかどうかは、最後まで不安だったが、さすがは百戦練磨のプロたち、3人かわるがわる、画面を見ながらそれぞれの持ち味でけんめいに「アーン」をやってくれた。

監督も笑い転げながら大OKを出し、私の、絶対スーハーを入れてくれるなどという頼みにも「よしよし」と言ってくれたのだった。ああそれなのにそれなのに...

出来上がった映画を劇場で見ると無残にも本番スーハーは堂々と入り、そのうえにコーラスのスーハーまでが入っていたのである。どうにもならない対位法...

スーハーにかける監督の執念には「マケソー」である。

(続く)

ユダヤ人とは誰のことを言うのか

純正律音楽研究会 正会員
弁護士 齋藤昌男

第1. 緒論

1. 天国で5人の偉人が、「人間の行動を本質的に規定するものは何か」について議論をしていたとの事です。エジプトの奴隷だったイスラエルの民をエジプトから導き、出エジプトを果たし、神から十戒を授かったモーセが「人間が人間であるための要素は理性である」と言ったそうです。それを聞いていたキリストが「愛である」と言ったそうです。そこへマルクスが現れ、「いや経済がすべてを決する」と言ったそうです。それを聞いていたフロイトが、「全てはセックスである」と言ったそうです。そこへアインシュタインが現れて「全ては相対的です」と言ったそうです。

良くアメリカで語られるジョークだそうですが、これらの5人は全てユダヤ人です。ノーベル賞受賞者の20パーセントは、ユダヤ人と言われています。しかし世界人口に占めるユダヤ人は、わずか0.2パーセントに満たないと言われています。

「ユダヤ人」というと、「第三の波」のアルビン・トフラー、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」のエズラ・ボーゲル、「21世紀は日本の世紀」のハーマン・カーン、「新しい現実」のピーター・ドラッカー、ニクソン、フォード大統領のもとで国務長官を務めたキッシンジャー、ジョンソン政権及びカーター政権での国家安全保障特別補佐官となったブレジンスキー、イスラエル建国の父と言われるベングリオン、そしてゴルダ・メイア、不条理を描くことで有名な小説家フランツ・カフカ、ユダヤ的なモチーフを詩情豊かに描く画家のマルク・シャガール、20世紀の代表的な報道写真家のロバート・キャバ、多作で知られるコメディ映画の鬼オウディ・アレン、ドイツの市民権を確保するためにキリスト教徒になるが、ユダヤ系の人々から疎外されたためパリに亡命した詩人のハインリヒ・ハイネ他がいます。

ユダヤ系アメリカ人の人口は500万人強、人口に占める割合は2パーセントと言われていますが、そのうちの40パーセント以上が北東部地域に集中しており、特にニューヨーク州にはその60パーセント近くがいます。そして大学卒業生の比率は、他の白人の3倍、ハーバード大学、イェール大学などの学生の20パーセント以上、教授に至っては、ハーバード大学の教授の半分はユダヤ人と言われています。

何故にユダヤ人は、この様に頭脳明晰なのか。一説によると、ユダヤ人は、幼少の頃より、彼らの教典であるトーラーを丸暗記するからだと言われています。真偽のほどは分かりませんが、本日は、別のテーマについて論じたいと思います。

2. 前々から何が本当かと疑問に思っているテーマがあります。前記のユダ

ヤ人は、全てアシュケナジーム系ユダヤ人であって、実はこのアシュケナジーム系ユダヤ人は、カザール人であったとの説があり、しばしばその説を聞く事があります。実は彼等は今から1000年以上前、中央アジアにいた。血縁的にはユダヤ人とは何の関係のないカザール人であったと言うのです。彼らは一方ではキリスト教・ビザンチンから圧迫を受け、他方ではイスラム教・アラブの圧迫を受けた。普通ならばどちらかに荷担してしまうところ、2つの宗教の根本はユダヤ教であるからユダヤ教に改宗したのだと言っております。カザール人たちはそのユダヤ教に国家を挙げて集団改宗したというのです。そして彼らは改宗する事によって「ユダヤ人」と称するようになったというのです。すると、アシュケナジーム系ユダヤ人は、旧約聖書のユダヤ人とは関係ないと言う事になります。これはあくまで仮説であると思いますが、その説について、多少なりとも検証したいと思います。

第2. アシュケナジーム (Ashkenazim) とセファルディーム (Sephardim) とは何か。

1. 紀元前6世紀以降、独立国家を失ったユダヤ人は、中東各地へ分散して暮らしていました。中世から近代にかけて、ユダヤ人は、中東からヨーロッパ各地に拡散しました。この内、ドイツ・東欧系のユダヤ人をアシュケナジームと呼びます。アシュケナジームは、イディッシュ語つまりヘブライ語の混じったドイツ語を話す人々です。イディッシュ語はヘブライ文字で書かれるので、一見するだけではヘブライ語とは区別が付きませんが、耳で聞くとたちまちドイツ語的響きがするそうです。イディッシュ語はドイツ語の隣接語で、語彙は約75パーセントがドイツ語起源、残りはアラム語・ヘブライ語で15～20パーセント程度、それにスラブ語、特にポーランド語から流入したものだそうです。近世ドイツにおいて、宮廷ユダヤ人としてウィーンやプラハ、ミュンヘンなどに暮らし、領邦国家の財政を動かした人々の大半はこのグループに属した人達だそうです。有名なフランクフルトのゲッター出身のロートシルト（ロスチャイルド家）もアシュケナジームです。但しアシュケナジームには貧しい都市生活者もいた様です。

2. セファルディーム（地中海系ユダヤ人）がスペインに定着したのは、ディアスポラ（離散）の時期にあたる1～2世紀です。西ゴート時代になると、スペインのユダヤ人は、かなりの数に達し、要職に就く宮廷ユダヤ人も登場しました。しかし、6世紀末の西ゴート王レカルド一世のカトリック改宗とともに、反ユダヤ政策が出て来ました。しかし、その後のイスラム軍の侵入により、スペインのユダヤ人は反ユダヤ政策から解放されました。

しかし、状況を一変させたのは、国土回復運動（レコンキスタ、Reconquista）です。711年の侵略以降イスラムの支配下に置かれたキリスト教徒の手に奪回する再征服運動で、1492年に半島最後のイスラム王朝であるクラナダ王朝が征服され、8世紀に及ぶ征服の歴史に終止符が打たれました。

セファルディームは字義通りにはヘブライ語の「スペイン」から派生した「スペイン系ユダヤ人」であります。中世カステイリア方言であるラディノー語を喋っていたそうです。しかしレコンキスタ後は、イベリア半島か

ら追放されて地中海周辺地域あるいはイギリスやオランダのプロテスタント地域に離散しました。

3. 現在、イスラエルでは、アラブ世界・イラン・トルコ・中央アジアなどの中東イスラーム世界出身のユダヤ人は、セファルディームを含めてミズラヒーム（オリエント系ユダヤ人）と呼ばれることが多いとのこと。

第3. アシュケナジー系ユダヤ人は、血統的には本当のユダヤ人ではないのか。

あくまで theory（仮説）ですが、ハンガリー生れのアシュケナジー系ユダヤ人であった有名な思想家アーサー・ケストラー（Arthur Koestler）は、1977年（The Thirteenth Tribe, The Khazar Empire and its Heritage, 第13支族、カザール帝国とその末裔）（邦訳「ユダヤ人とは誰か」（三交社））を著しました。同書が語る概要は前述の通りですが、以下要点を繰り返します。

カザール帝国は、6世紀から10世紀頃にかけて、中央アジアにトルコ系の遊牧民が打ち立てた王国であります。紀元8世紀頃に、彼らは一方ではキリスト教・ビザンチンから圧迫を受け、他方ではイスラム教・アラブの圧迫を受けました。彼等はどちらへも荷担せず、キリスト教もイスラム教もユダヤ教から出ているので、カザール人達は、国家を挙げてユダヤ教に集団改宗したのだとこの本は言っています。彼らは改宗することによって、自ら「ユダヤ人」と称する様になったのです。後に1215年頃より蒙古軍（元軍）が東から中央アジアの草原に進軍してきたので、ユダヤ人と称するカザール人は、北へ移動して行ったと言っております。そしてロシア、ポーランド、ドイツなどに定住する様になったと言っております。

第4. NHKの放送大学教材の誤り

1. ところでNHKの放送大学教材 高橋和夫著「国際理解のために」の88ページに下記の記述がありました。

「国家単位で改宗した例としてカザール王国をサンドは指摘している。カザール王国は、現在の南ロシアにあたるドン河やボルガ河沿いの草原地帯を支配しており、8世紀から9世紀にかけてユダヤ教に改宗した。改宗に当たり、なぜユダヤ教を選択したのか。当時のカザール王国は南西で東ローマ帝国（ビザンチン帝国）そして南でアッバース朝と国境を接していた。前者は、もちろんキリスト教の国であり、後者はイスラム教の国であった。両者と対抗し、独立を維持するためには、一神教でありながら、キリスト教でもイスラム教でもないユダヤ教をカザール王国は選択したとサンドは推測する。この王国は11世紀には衰え、13世紀にモンゴルが南ロシアに制圧すると多くのユダヤ教徒が、東ヨーロッパへと移住した。これが、東ヨーロッパのユダヤ教徒の祖先だとサンドは解説する。

現在でも残存するコーカサスのユダヤ教徒はカザール王国の末裔であろうか。またカスピ海のことをペルシア語では今でも『カザールの海』と表現する。消え去ったユダヤ教の王国の言語学的な残影であろうか。」

2. これを読んだときに、筆者は、アーサー・ケストラーの「ユダヤ人とは誰か 第十三支族 カザール王国の謎」と同じ仮説ではないかと思いました。大変興味を持って、シュロモー・サンドの「ユダヤ人の起源」（歴史はどのよ

うに創作されたのか) (活気社発行) を読んでみることにしました。翻訳で460ページもある大著です。然も極めて読みにくい訳文の本です。

NHK放送大学の教材には、アーサー・ケストラーの名前は全く出て来ません。しかし、前記「ユダヤ人の起源」を読んで見ると、シュロモー・サンドの仮説は、大分アーサー・ケストラーとは異なっています。NHKの放送大学の教材の著者は、シュロモー・サンドの本を本当に読んだのか、と問いたくになります。引用の間違いではすまされないでしょう。

3. ただシュロモー・サンドは、アーサー・ケストラーを擁護して次の様に言っています。(ユダヤ人の起源、359ページ)

「非アシュケナジー系ユダヤ人はほんとうにユダの人々の子孫だったのだろうか、またハザール人の改宗はユダヤ人の歴史において例外的な一事例にすぎなかったのだろうか、これらの疑問にケストラーは答えかねていたし1970年代になってもなお自問をつづけていた。当時ケストラーは、人種差別主義と反ユダヤ主義との闘いが“想像上の存在としてのシオニズムの支配”にとってどれほど致命的となりうるかについては、まだはっきり気づいてはいなかったのだ。実際のところ、頭では分かっている、ほんとうには理解していなかったのだろう。そういうわけで、彼がナイーブにも考えたのは本書を書きあげたあとで、截然とした政治的立場をとれば、自分は赦されるだろうということだった。『本書が、イスラエル国家の存在権を否定するものと、悪意をもって解釈されかねないことを私は知らないわけではない。しかしこの権利は、ユダヤ人の仮説上の起源に基づくものでもなければ、アブラハムと神のあいだの神話的契約に基づくものでもない。イスラエルの存在権は国際法に、正確に言えば、1947年の国際連合の決定に基づいている。[中略]イスラエルの市民の人種的起源がいかなるものであれ、また市民たちがみずからについていただく幻想がいかなるものであれ、彼らの国家は法的にも事実の上でも存在している。ジェノサイドにでもよらないかぎり、この国家を抹殺することは不可能である。』

4. 以上述べたことから明らかなの如く、アシュケナジー系ユダヤ人の先祖は、カザール人であるとするのは、あくまで大胆な仮説 (theory) であると言えるでしょう。

第5. ユダヤ人とは誰か。

1. イスラエル人、ヘブライ人、ユダヤ人 と3つの呼び名がありますが、違いがあるのでしょうか。

紀元前1000年という昔にすでにユダヤ人の祖先が民族として存在していました。その民族は、「イスラエル」という部族連合(12部族ある)を形成し、独立国家を形成していました。その民が使っていた言語をヘブライ語と言い、古代においてすでに日常語として死語になっていましたが、20世紀にイスラエル国が誕生したときに復活を遂げ、イスラエルの公用語となりました。

2. 現代のイスラエル国の国民も日本語ではイスラエル人となりますが、これはあくまでも国籍の名称にすぎません。アメリカには多くのユダヤ人が住んでいますが、その人達をイスラエル人と呼ばないのは、勿論のことであり

ます。

3. 紀元前6世紀頃には、ユダヤ人は独立の国家を失ってしまいますが、それ以降、中世を経て現代に至るまでユダヤ人と呼ばれるのが普通です。

4. ではパレスチナ人とは、誰を指すのか。

(1) まずパレスチナの地域をはっきりさせておく必要があります。地中海東岸の地方で、カナンとも呼ばれていました。紀元前1200年頃に住み着いたペリシテ人が語源とされています。前10世紀にはイスラエル王国が建国され、中心都市としてエルサレムが建設されました。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地を包括するため、十字軍など様々な勢力の興亡の舞台となり、16世紀以降オスマン帝国の支配下に入りました。第1次世界大戦後、オスマン帝国の領地からイギリス委任統治領となり、以後、シオニズムによるユダヤ移民が進展しました。

(2) (第1次中東戦争) 1948年にイスラエルが独立宣言をしたことに反対して、アラブ諸国がイスラエルに進撃したことから始まりました。これによってパレスチナの約80パーセントがイスラエル領になり、パレスチナ難民が発生しました。

(3) (第2次中東戦争) スエズ戦争とも言いますが、ナセル大統領が、1956年、スエズ国有化を宣言し、国際世論に押されて、イギリス、フランス、イスラエルはエジプト侵略を断念しました。

(4) (第3次中東戦争) 1967年6月イスラエルが電撃的にエジプト、シリアなどを攻撃しました。六日戦争とも呼ばれます。イスラエルは、エルダン川西岸、シナイ半島、ゴラン高原などを占領しました。

(5) (第4次中東戦争) エジプト、シリアが1973年、イスラエルに進軍し、軍事的にはイスラエルに有利に終わりました。

(6) パレスチナ人(パレスチナ難民)とは、パレスチナに住むアラブ人、及びイスラエル建国後、パレスチナから離散したアラブ人を指します。宗教的にはムスリムが圧倒的ですが、キリスト教徒もいます。

(7) 1993年、オスロ合意。パレスチナの暫定自治が認められ、ガザ、イエリコなどで暫定自治が始まりました。

5. ユダヤ人がパレスチナを離れた歴史は一度だけでなく、大きなものを拾っても、紀元前7世紀のアッシリアによるイスラエル王国の滅亡、紀元前6世紀の新バビロニアによるユダ王国の崩壊などの結果、紀元1世紀のローマ帝国によるパレスチナからのユダヤ人追放の前に、すでにインドを含めた中央アジア、中東、北アフリカ、イエメンには、流浪の民としてのユダヤ人社会が存在しておりました。

第2次世界大戦が勃発する直前の1939年、世界のユダヤ人人口の合計は1670万と推定されており、このうち950万人はヨーロッパに住み、しかも330万人がポーランドに集中していたとの事であります。テオドール・ヘルツルをはじめシオニズム運動家の多くが当初考えていたのは、経済的にも貧弱で、人種的な差別に悩まされ続けているこれら東欧のユダヤ人に「ユダヤ人国家」という救いの場を提供することだったのです。

ところがユダヤ人国家が現実となった時には、救済の対象となるべき東欧

のユダヤ人はほとんど残っておりませんでした。（「揺れるユダヤ人国家」40ページ）。言うまでもなく、原因はホロコーストのためです。

19世紀末における反ユダヤ主義へのユダヤ人のナショナリズム的な対応であるシオニズムは、ユダヤ人解放後であっても、ヨーロッパのキリスト教社会への同化は不可能だとする考え方に基づいてユダヤ人国家建設を構想したのです。これが1948年のイスラエル国家の成立へと繋がります。

6. ユダヤ移民受け入れの根拠となっている1948年制定の「帰還法」では、ユダヤ人とはユダヤ教徒あるいはユダヤ人を母として生まれた者のことであるとしています。その後キリスト教徒への改宗者が、信仰はカトリック教徒であるが、民族はユダヤ人だとして帰還法に基づき、イスラエル政府に移民を申請したのをイスラエル政府は申請を却下し、イスラエル最高裁も同様の決定をしました。このため1960年に帰還法が改訂されて、「他宗教に改宗しない者」という条項が加わりました。

正確な人口統計はないが、現在の世界のユダヤ人の人口は1300万人を超えており、イスラエルとアメリカにそれぞれ500万人強が居住していると言われているそうです。（弘文堂発行、現代社会学事典、1283ページ）

7. ユダヤ人は一つの民族と言えるのか。

民族とは何か。これを考えるには、客観的基準と主観的基準の組み合わせが手掛りになるようです。客観的基準とは、「言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された人々の堅固な共同体である」と言う。主観的基準としていちばん重要なのは、「われわれ意識」と言う。そして、民族で重要なのは、共属感覚であるという。すなわち、風土、生活条件、社会・家族制度、人間関係の在り方、言語、宗教信仰、衣食住の慣行の総体こそ共属感覚を作り出してきたのであるという（以上、弘文堂発行、現代社会学事典、1234ページ）。

ユダヤ人は、大きくイスラエルとアメリカに分かれ、なお世界各地に離散していても、上記の客観的基準、主観的基準、共属感覚を満たすと言えないでしょう。

以上

前2600頃 エジプト第4王朝の諸王、ギゼーにピラミッド群を造営

前2500頃 シュメールのウル王墓造営

前1500頃 ヘブライ人、パレスティナに定住、一部はエジプトへ

前1369 エジプト、イクンアトン（アメンホテプ4世）の宗教改革（一神教の確立）

前1290頃 モーセ指揮下のヘブライ人、エジプト脱出

前1004頃 ダビデ王、ソロモン王の時代（—931頃）

前721 アッシリアのサルゴン2世イスラエル王国を属国とする

前625年—前539年 新バビロニア王国

前605年—前562年 ネブカドネザル2世（住民をバビロニアに強制移住）

前586年—前538年 バビロン捕囚

前550年 キュロス大王、メディナ王国を滅ぼす
アケメネス朝ペルシア帝国の始まり
前539年 バビロンの陥落
前538年 キュロス大王のユダヤ教徒解放
前515年 エルサレムの第二神殿の完成
前356-323年 アレキサンダー大王
前330年 アケメネス朝の滅亡
前248年-後226年 パルチア（イラン、メソポタミアを支配した王国）
後70年 ローマによるエルサレム攻略、第二神殿の破壊
3世紀 「70人訳聖書」
後226年-642年 ササン朝ペルシア帝国
755年-763年 安史の乱（唐の中期、安祿山父子・史思明父子によって指導された反乱）
13世紀 モンゴルの拡大
1879年 キュロス円筒印章の発見
1948年 イスラエル国成立／第1次中東戦争
1952年 エジプト革命
1956年 エジプト、スエズ国有化宣言第2次中東戦争
1967年 第3次中東戦争（「6月戦争」とも「6日間戦争」とも呼ばれ、アラブ現代史の出発点と言われてる）
1973年 第4次中東戦争O A P E C 10ヶ国は原油供給の削減と値上げを表明（第一次オイルショック）
1993年 パレスチナ暫定自治合意

（平成29年4月24日脱稿）

**玉木宏樹遺作 小説【春の声】
連続四回 最終回**

Tさんはそれっきり、オーケストラに来なくなり、しばらくして、ヴァイオリンの先生のところもやめてしまいました」
男はいつしか額に脂汗をうかべ、憎悪に満ちたまなざしで、圭ちゃんをにらみつつけている。

妙に陰悪な間がつづくうち、レコードも終わり、女の整理している食器の音だけが、空しく店に響き渡った。

「それでTさんはどうした？」

男は押し殺した声できいた。

「えっ」

圭ちゃんは少しひるみながら答えた。

「べつに-----。それだけの話です」

男は、平静を装った低い声で、早口で言った。

「きみのおもい出話は、それで終わりか。もっともらしいことばかり言って。全部ウソじゃないか、作り話だ、デッチ上げだ」

「そんな」

圭ちゃんは、強く否定もせず押し黙った。

「よく聞いてればなんだ、いまの話は！ あれは全部、ぼくの話じゃないか」

「-----」

「だいたいきみは、神戸生まれだと言ったな。じゃ、神戸弁をしゃべってみろ」

「そんなこと、急にいわはりまして、うまいこといきまへんがな」

「ふーん。たしかに神戸らしい。じゃ、きみのうちはどこにある」

「兵庫区湊川七丁目」

「それ見ろ、大ウソだ。ぼくのうちは石井町三丁目」

「そりゃ先生、あたりまえでしょ。ぼくのうちは湊川町で、先生のうちとはちがいますもん」

男はたまりかねたのか、やや声をあげた。

「きみが、なんのためにこんな作り話をするのかよくわからん。しかしまあ、それにしてもよくもそこまでぼくのことを調べあげたもんだ。最初のうちは、あまりにもぼくと境遇が似ているんで、ビックリしてたんだ。ピーターと狼の話まではね」

「-----」

「しかしきみは、まちがいをおかした。仏教会館は浜側で、絶対に山側ではない。そして、決定的な二つのまちがい-----。ぼくは当時、小学校六年生くらいで、中学じゃなかった。だから、TさんとNさんとやらの色恋の話なんかあるわけがない。そしてもうひとつ決定的なこと、それは神戸の住所だ。さっきなんて言った、もういちど言ってみろ」

圭ちゃんは平静に答えた。

「湊川七丁目」

「そら見ろ、さっきも言ったように、ぼくの住所は石井町三丁目だ。ヴァイオリンを習うほどの高級住宅街じゃないし、ぼくもたしかに、一人っ子で貧乏人のせがれだ。だけど、そんなことをあばきたてて何になる。なんのためにそんな作り話をしてぼくを当惑させるんだ」

「-----」

「たしかにぼくは、Tさんのことをオンチだと言って笑いものにしたことはある。しかし彼女がヴァイオリンをやめたのは、それが原因じゃない。ほかにちゃんとした理由があったんだ」

「どんな理由です」

圭ちゃんはあくまで平静である。

「うちが貧しいうえに、兄弟が多く、長女だった彼女は、みんなの面倒を見るために、ヴァイオリンを続けることができなくなったということだ」

「先生は、ほんとうにそう思っているんですか」

「ほんとうもなにも……。ずいぶん変なことをいうじゃないか。なにかぼくに恨みでもあるのか。デタラメばかり並べたところで、最後にはボロがでるものだ。住所を調べないなんていう初歩的な、つまらないミスをして。すぐわかることなのに、なぜ……」

男は怒りを押さえながら、ゆっくりと店内をながめまわしていたが、突然、視点を中空に貼りつかせ、顔色をかえ、大声をあげてビールグラスをテーブルに叩きつけた。

「あっ、そうか！ 湊川七丁目……ウーン、気がつかなかった。そうか、ヒョッとしたらきみは」

男は大口をあげ、絶句した。

「先生、やっと気がつきましたか」

男の息づかいは荒くなり、肩がふるえはじめた。

「きみは、きみは……」

「そうです、そのTさんの弟です」

男は、急に居心地悪そうに体を堅くした。眼線もキョロキョロと落ち着きをなくし始める。

「姉は、たいへん心のやさしい人でした。たしかに少々無口で、陰気くさいところもありましたがね。でも姉は、あの日曜日をほんとうに楽しみにしていて、うちへ帰っては、ぼくたちに一部始終を報告しました。とくにあなたのことを中心にね。姉はほんとうにヴァイオリンが好きで、あなたが好きだったんです」

「……」
「うちでよく言っていました。I君は天才だ、すばらしい、I君も私のことを好きだし、とっても幸せだってね。あなたと一緒に通いだすようになって一年くらいは、毎週毎週、同じことばかり聞かされて、家族はいささかウンザリしたもんです。ぼくなんか、まだ小学校の低学年だったから、将来、必ずあなたと姉は結婚するものと思いこんでいたくらいです。それが一年くらいたってから、段々とふさぎこむようになって」

「……」

「そして、ある日曜日、ずいぶん遅くなって、泣きながら帰ってきた姉は、一切なにも言わず、ヴァイオリンケースを開けました。中からでてきたのは、無残にも破壊され、修復不可能な状態になってしまったヴァイオリンの残骸でした。父はきつく姉に詰問しました。誰にこわされたんだ、と。一晩中問いただす父にも姉は一切口を開きませんでした。

そして、オーケストラも、ヴァイオリンの先生のところもやめた姉は、日ごとにドンドンと陰気に落ち込んでいって……ついには精神病院に……」

「えっ！ ノイローゼ？」

「そんなんじゃないですね。精神分裂症です」

「……」

「うちの父も、すこし精神状態がおかしかったんですが、それが遺伝でもしたんでしょうか。姉は、ヴァイオリンを奏きながらも、耳鳴りがすると、しょつちゅうこぼしていました。入院してからも姉が口にするのは、音程のことばかり。つまり姉は、耳鳴りのせいで、音程が正しくとれなかったんです」

「そうか」

男は肩をおとし、弱々しく弁解した。

「しかし、小学生の子供の言ったことだよ。いつまでもそんなことを言われても……。それできみの姉さんは、いま？」

「姉は自殺しました」

「えっ！」

男は一瞬たちあがりかけて、すぐにヘナヘナと崩れこんだ。

「そんな、そんなバカな」

「ぼくはべつに、あなたを責めるつもりはありません。しかし、事実だけは知ってもらおうと思って」

「いまさら、なにをどうするつもりだ……。死んでしまったのか、しかしまたどうして……」

「姉は、ほんとうにあなたのことを」

「圭ちゃん、いいかげんにしなさい」

カウンターから大声がとんできた。やがて女はテーブルの方に近寄ってくる。

「そんなオーバーなウソをついて、先生に迷惑じゃない。いいかげんにしなさい」

事態の新たな急展開についていけないような情けない顔で女を見続けていた男は、オズオズと言った。

「きみは……きみこそヒョットして」

「Iさん、ほんとうにしばらくです。あのときのTです」

「どうりでこの店に入ったとき、どこかで逢ったような気が一瞬したんだけど……。そうか、自殺したんじゃないの？」

「死んでたらいま、お話しできるわけがないでしょう。圭介がオーバーなことばかり言うもんだから」

男は、ホッとすると同時に、照れと怒りに混じった視線を圭介に向けた。

「姉さん、ダメだよ、ほんとうのことを言わなきゃ。そんなアッサリゆるすなんて、信じられないよ。だって姉さんが入院したのは事実なんだから」

「昔のことは、もういいじゃないの。だいたい精神分裂病だなんて、大げさなことを言って、ただのノイローゼよ、人聞きの悪い。それも、アンタたち兄弟の面倒見で疲れちゃったのが原因なんだから」

「しかし姉さん、あんなに好きだったヴァイオリン、Iさんのために」

圭ちゃんの必至の形相に、男はたじろいだ。

「ぼくがヴァイオリンを始めたのも、あのことがきっかけだったし、店の名前にしても」

「もう昔のことよ。いまになってみれば、恨みなんかあるもんですか。それよりも、ほんとうに懐しいわねえ、Iさん」

男は、やっと少しホッとしたようだった。

「それでこの店、＜春の声＞っていうのか」

「ねえ、Iさん。ちょっとお伺いしますが、Nさんはいまどうしてらっしゃるかしら、お逢いになりますか？」

「いや、最近は逢わないけど、自分の入っていたオーケストラの団員と結婚し

てオーケストラをやめてからは、うちでヴァイオリンの先生をしてるとかいう話しだが」

「そう……まじめにやってらっしゃるのね。ああいう人の方が、まともなのよね。私なんか暗い暗いと言われながら水商売になっちゃって……」

さっき弟がオーバーに言ったことのなかで、Nさんが意地悪ばかりしてたようなこと言ってたけど、そんなことはなかったのよ。そりゃ子供だから他愛ないイケズはあったかも知れないけど、そんなこと、私はまったく気にしなかったのにあの人、私がヴァイオリンをやめてから、わざわざうちにまで来てくれたのよ。ヒョットしたら、自分がいじめたことが原因かも知れないと思ったといつてね。ほんとにのびのびした、おおらかないい人だったわ。それにひきかえ、私は……」

「良い店じゃないか、これからも利用させてもらうよ。あのね、店の名前のことなんだけどね、ちょっと考えすぎかも知れないけど、この名前にすれば、ぼくがくるかも知れないと……」

「いいえ、そんなことは全然ありません」

圭ちゃんは、きっぱり言い切った。

「先生は、どんどん有名になられるし、こんな場末の飲み屋に来てくれるなんて、夢にも思いませんでした。だいいち、あなたに逢うつもりなら、いつでもこちらから出かけて行けばいいでしょう」

「それもそうだ」

「さっきの大山先生ね。あのかたに、よく昔話をしていたの。そうしたら」

「そうか、それで彼がここへ連れて来たのか。＜春の祭典＞のあとの＜春の声＞、なーるほど。彼も、なにか急に用事を思いだしたようにしてあわてて帰っちゃったなあ」

沈黙がつづいた。

しかし、もはや気まずさは消え、はるかな追憶が三人を包んだように見えたとき、壁にかかった大きなローマ数字の時計が、淀んでくぐもった音をたてた。二十数年の、時の底から湧きだしてきたような、アンティークな響きだった。



今後のスケジュール

【癒しの純正律音楽コンサート】

2017年9月16日土曜日 16時開演

会場：山崎製パン 飯島藤十郎社主記念 LLC ホール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

ゲスト出演：ベアンテ・ボーマン(チェロ)

入場料：前売り 3,000 円 (当日券 3,500 円) 学生 2,000 円

会員特別価格 2,000 円



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成 29 年 5 月 26 日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫